

大台ヶ原自然再生推進計画第2期計画案と第1期計画の構成対応表

第2期計画構成案	対応する第1期計画の項目	ページ	備考
はじめに	第1章 背景・経緯と計画の位置づけ	1-2	
第1章 自然再生の取り組みに至る経緯と背景	第2章 2. 対象地域の現況と課題	6	
1. 自然環境の特性	(1) 自然環境の特性	6	
(1) 地形・地質	1) 地形・気象	6	
(2) 気象	1) 地形・気象	6	
(3) 植生	2) 植生	6-9	
(4) 生物相 (植物相、動物相 (ニホンジカ含む))	3) 生物相	10-12	
2. 社会環境の特性			
(1) 観光動向 (利用状況等)			
(2) 土地利用状況 (山林、農地、市街地等)	第2章 3 (1) 利用の歴史的経緯	43	
(3) 人口			
(4) 産業			
(5) その他			
3. 大台ヶ原における自然環境の変遷と自然再生の取り組み	第1章 背景・経緯と計画の位置づけ	1-2	
	第2章 3 (1) 利用の歴史的経緯	43	
	第3章 これまでの対策等の評価分析	57	
	第6章 1 (6) 多様な主体の参画	85	
第2章 自然再生の対象となる区域			
1. 推進計画の対象となる区域	第2章 1 対象地域	3-5	
	第6章 1 (1) 計画対象地域	73	
2. 土地所有	第6章 1 (1) 2) 面積および土地所有関係	73	
3. 土地利用	第6章 1 (1) 4) 土地利用の現況	73	
4. 法規制関係等 (国立公園、鳥獣保護区、森林生態系保護地域等)	第2章 1 対象地域	3-5	
	第6章 1 (1) 3) 権利制限関係	73	
第3章 対象区域内の現況と課題			
1. 森林の現状と課題			
(1) 森林衰退の経緯と現状	第2章 2 (2) これまでの森林衰退の経緯	13	
(2) 野生動物の生息状況と保全上注目すべき種	第2章 2 (5) 保全上注目すべき種の現状と課題	38	
(3) 森林生態系保全再生に係るこれまでの取組と評価	第2章 2 (4) 森林の衰退に伴う野生動物の生息環境の変化	37	
(4) 森林生態系保全再生に係る課題	第2章 2 (3) 森林の更新に関する問題点	17	
2. ニホンジカ個体群の現状と課題			
(1) ニホンジカ個体群の現状	記載なし	-	
(2) ニホンジカ保護管理に係るこれまでの取組と評価	記載なし	-	
(3) ニホンジカ個体群の保護管理に係る課題	記載なし	-	
3. 利用現況と課題			
(1) 利用状況の推移 (歴史的経緯を含む)	第2章 3 (3) 利用の現況 1) 車両の出入状況	46-48	
(2) 利用の特徴 (利用特性、利用マナー等)	第2章 3 (3) 利用の現況 2) 利用の特性	49	
(3) 利用による自然環境への影響 (これまでの利用対策の成果等を含む)	第2章 2 (6) 利用における自然環境への影響	39-42	
(4) 利用の在り方に係る課題	第2章 3 (3) 利用の現況 3) ピーク時の利用状況と課題	50-56	
第4章 自然再生の基本的な考え方	第4章 自然再生の基本的な考え方	71	
1. 大台ヶ原の特性と復元力を踏まえた取組の実施	第6章 1 (3) 基本方針	75	
2. 長期的な視点に基づく取組の実施	第6章 1 (3) 基本方針	75	
3. 科学的知見に基づいた順応的管理	第7章 モニタリング	115	
4. 関係者の連携	第6章 1 (6) 多様な主体の参画	85	
5. 成果の活用と普及啓発の推進	記載なし	-	
第5章 自然再生の目標			
1. 目指すべき大台ヶ原の姿 (長期目標)	第5章 自然再生の目標	72	
2. 当面20年程度の間に実現を目指す姿 (中期目標)			
(1) 森林生態系保全再生	第6章 1 (2) 目的	75	
(2) ニホンジカ個体群の保護管理	第6章 2 (1) 目的	86	
(3) 新しい利用の在り方	第6章 3 (1) 目的	95	
第6章 目標達成のために実施する取組と評価方法 (短期目標)			
1. 森林生態系保全再生	第6章 1 森林生態系保全再生計画	73-85	
(1) 目的			
(2) 基本方針			
(3) 取組内容			
(4) モニタリング及び取組の評価	第7章 1 森林生態系の保全・再生に関するモニタリング		
2. ニホンジカ個体群の保護管理 (ニホンジカ保護管理部会で検討)	大台ヶ原ニホンジカ保護管理計画 (第2期)		
(1) 目的	1. 2. 計画策定の目的	2	
(2) 基本方針	5. 3. 目標を達成するための施策の基本な考え方	24	
(3) 計画期間	3. 1. 計画期間	3	
(4) 取組内容	6. 特定鳥獣の数の調整に関する事項	24-29	
	7. 特定鳥獣の生息地の保護管理のために必要な事項		
(5) モニタリング及び取組の評価	8. 1. モニタリング等の調査研究	30-31	
3. 新しい利用の在り方推進 (利用対策部会で検討)	第6章 3 新しい利用のあり方推進計画	95-114	
目的、基本方針、計画内容、モニタリング (評価手法含む) について記述	第7章 2 利用状況に関するモニタリング	118	
4. 横断的取組			
(1) 情報の共有	記載なし		
(2) 成果の活用	第7章 3 多様な主体の参画に向けて 等	119	
第7章 実施体制等			
	添付資料1	添付1	
	第6章 1 (6) 多様な主体の参画	85	
	第7章 3 多様な主体の参画に向けて	119	
第8章 全体スケジュール	第8章 スケジュール	120	
付 録			
森林生態系保全に関する資料			
ニホンジカ個体群の保護管理に関する資料			
利用の在り方に関する資料			
第1期計画の検討概要、事業実施結果等			
その他 (歴史年表等)			

大台ヶ原自然再生推進計画（第 2 期）の構成及び項目（素案）
（主にニホンジカ保護管理計画に係る部分）

はじめに

（記述方針）

推進計画の位置づけ、目的及び自然再生の意義について簡潔に記述する。

- ・大台ヶ原の生態系の全国的な位置づけ、重要性等
- ・自然再生の意義（大台ヶ原の生態系の衰退の概要、自然を再生、復元し次世代のための伝える取組であること等）

第 1 章 自然再生の取り組みに至る経緯と背景

（記述方針）

大台ヶ原の自然の特性と歴史、これまでの自然環境保全の取組、自然再生の取組経緯等について概要を記載し、推進計画策定の背景についての解説とする。なお、自然環境の特性の記述に当たっては、大台ヶ原が生物多様性保全上重要地域であること等について全国的な位置づけが明確になるよう留意する。

（記述項目）

1. 自然環境の特性

（1）地形、地質

- ・大台ヶ原の位置
- ・地形は、日出ヶ岳、三津河落山等の代表的なピーク、地名、標高の範囲等
- ・山上の平坦な地形と周囲の急峻な崖地等地形の特徴
- ・地質の特徴の説明

※ 掲載する図表類

- 近畿地方における大台ヶ原の位置図
- 大台ヶ原の標高区分図
- 大台ヶ原の傾斜区分図
- 大台ヶ原周辺の水系区分図（3水系：宮川水系、紀ノ川水系、熊野川水系）
- 大台ヶ原周辺の表層地質図
- 急峻な地形がわかる写真

（2）気象

- ・屋久島と並ぶ日本有数の多雨地帯であること
- ・月別平均気温等により近畿地方では冷涼な場所であること

※ 掲載する図表類

- 近畿地方における降水量分布図（メッシュ気候値 2000 から作成）
- 月別降水量のグラフ（最近 10 年ぐらゐの平均）
- 月別平均気温（アメダスのデータおよび昨年の気温データ）

（3）植生

- ・代表的な植生として東大台のミヤコザサ群落、トウヒを主とした亜高山性針葉樹林、大蛇峠をはじめとする岩角地と西大台のウラジロモミ、ヒノキが混交する太平洋型ブナ林、沢筋にあるトチノキ-サワグルミ群落について説明

※ 掲載する図表類

- 紀伊半島における自然植生の分布図（自然環境 GIS から作成）
- 航空写真（2005 撮影オルソ画像）
- 相観植生図（大台ヶ原：2005 撮影オルソ画像から作成）
- 大台ヶ原の植生垂直分布模式図（第 1 期 p6 図 2-3）
- トウヒ林、ブナ林、ミヤコザサ草地の写真

(4) 生物相（植物相、動物相（ニホンジカ含む））

- ・ 植物、動物について確認種数
- ・ 特徴的な植物、動物について示し、特に新種や固有種、オオダイガハラの名が付く種などを例示
- ・ ニホンジカの個体数密度が他地域に比べ高いこと

※ 掲載する図表類

- 大台ヶ原で特徴的な動植物を示す表
- 特徴的な動物、植物の写真

2. 社会環境の特性

- ・ 大台ヶ原周辺地域の社会環境の概要について記述
- (1) 観光動向（利用状況等）
- (2) 土地利用状況（山林、農地、市街地等）
- (3) 人口
- (4) 産業
- (5) その他

3. 大台ヶ原における自然環境の変遷と自然再生の取組

- ・ 年表を用いて、大台ヶ原の自然環境の変遷や利用の歴史
- ・ ミヤコザサ草地の拡大、下層植生など森林の衰退の経緯
- ・ ニホンジカ個体数密度の増加
- ・ 自然再生事業の前のトウヒ保全対策事業等の植生保全対策について整理

※ 掲載する図表類

- 大台ヶ原の歴史年表（第 1 期 p44 の表を修正）
- 森林衰退の流れ（推定）図（第 1 期 p 16 の図を自然再生事業パンフレットの図にする）
- 過去と現在の大台ヶ原の写真（過去 [トウヒ林：菅沼、ブナ林：中静]、現在）

第 2 章 自然再生の対象となる区域

(記述方針)

自然再生の対象となる範囲・土地所有等を明確にする。なお、対象区域と隣接する地域において情報収集等を行い、概況を把握する範囲についても記述する。

(記述項目)

1. 推進計画の対象となる区域

- ・ 吉野熊野国立公園内の自然再生推進計画対象区域の位置と面積
- ・ 対象区域と隣接する地域において情報収集等を行う区域

※ 掲載する図表類

- 大台ヶ原の位置図（周辺町村が含まれる程度の縮尺）
- 大台ヶ原環境省所管地の位置図（第 1 期 p5 図 2-2）

2. 土地所有

- ・ 対象地域の土地を所有する環境省と奈良県有地、それぞれの場所とその面積

※ 掲載する図表類

→ 土地所有位置図（第1期 p74 図6-1）

3. 土地利用

- ・ 対象地域の土地の利用状況を林地と車道、施設等に別け、それぞれの場所と面積

※ 掲載する図表類

→ 土地利用面積の表（第1期 p73 下の表）

→ 土地所有面積の表（第1期 p73 上の表）

4. 法規制関係等（国立公園、鳥獣保護区、森林生態系保護地域等）

- ・ 国立公園の位置、地種区分、面積
- ・ 鳥獣保護区の位置、地種区分、面積
- ・ 大杉谷森林生態系保護地域の位置、地域区分、面積

※ 掲載する図表類

→ 大台ヶ原環境省所管地の位置図

→ 鳥獣保護区区域図

→ 森林生態系保護地域図

第3章 対象区域内の現状と課題

1. 森林の現状と課題

- (1) 森林衰退の経緯と現状
- (2) 野生動植物の生息状況と保全上注目すべき種
- (3) 森林生態系保全再生に係るこれまでの取組と評価
- (4) 森林生態系保全再生に係る課題

2. ニホンジカの個体群の現状と課題

(1) ニホンジカ個体群の現状

昭和30年代以降の森林衰退を受けたミヤコザサ草地の拡大がニホンジカに良好な餌場や生息場所を提供したことや、周囲の森林地域からの移入などもあり、東大台のニホンジカ個体数が増加したものと考えられる(1.(1)参照)。生息密度は1990年代をピークに減少傾向は示しているものの、平成20年時点で東大台地区が31.9~49.0頭/km²、西大台地区が0.7~46.1頭/km²であり、依然として高い生息密度である(表-1)。

表—1 同一地点・メッシュにおける生息密度調査結果（糞粒法）

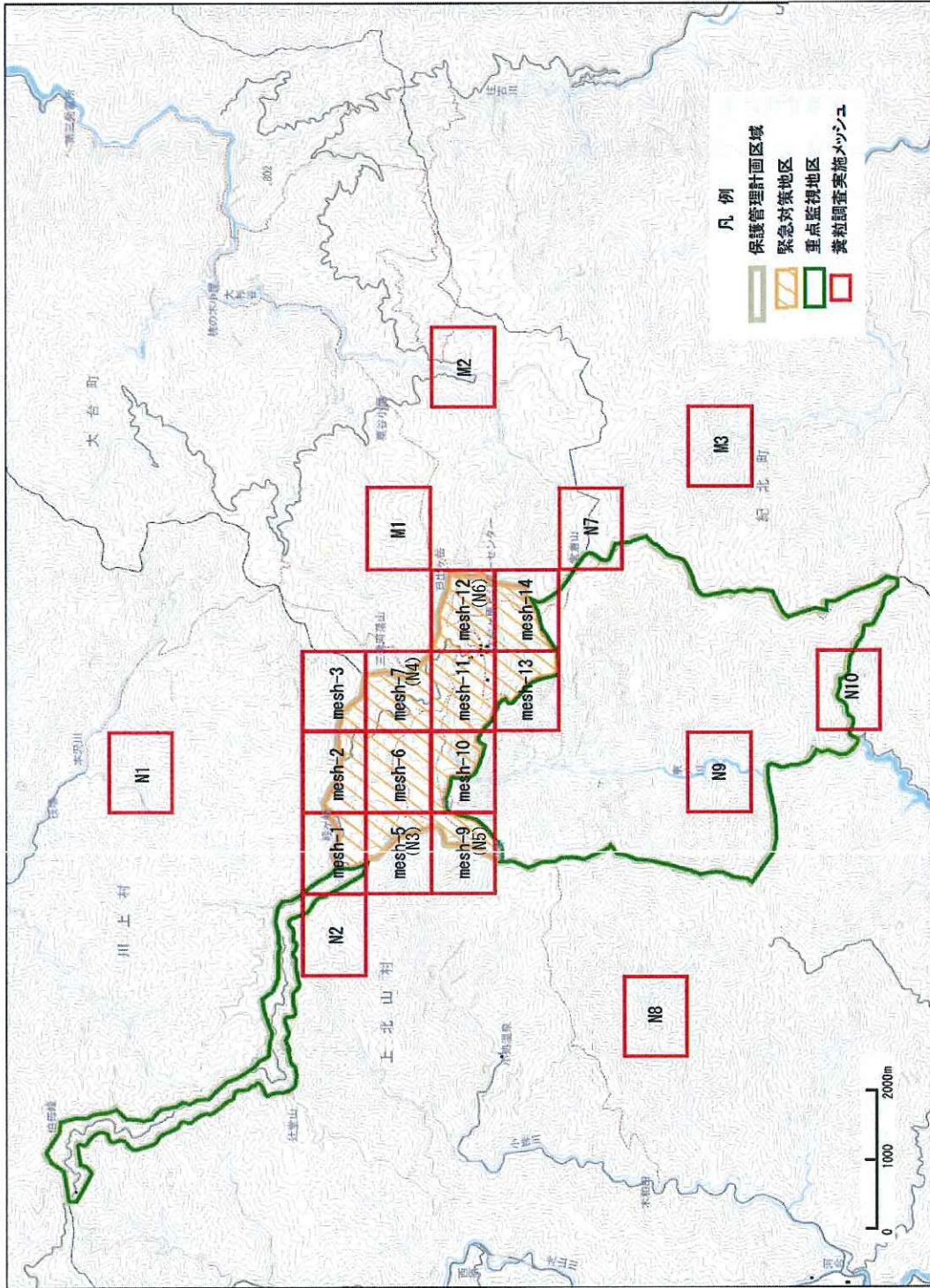
対象区域	調査メッシュ※1	調査地点※2	生息密度（頭/k m ² ）								
			H13	H15	H16	H17	H18	H19	H20		
緊急対策地区	東大台地区	mesh-12 (N6)		67.2	117.2						
			I		75.4	178.9	55.3	78.0	48.7	32.2	
			II		40.2	40.0	108.9	60.9	48.5	31.9	
			IV		51.7						
		mesh-13			118.7	61.5	93.5	59.5	49.0		
		mesh-14	III		43.2	29.2	32.4	52.6	71.1	39.8	
		平均		67.2	65.5	91.7	64.5	71.3	57.0	38.2	
	西大台地区	mesh-1	VII		4.6	0.6	3.8	12.9	0.9	5.3	
		mesh-2				4.0	9.8	13.6	5.1	12.0	
		mesh-3				2.7	2.3	11.0	4.1	3.5	
		mesh-5 (N3)		14.5	18.2	0.7	9.9	2.6	0.5	0.7	
		mesh-6	No.6			6.6	66.9	15.9	16.9	8.8	
		mesh-7 (N4)	No.1	12.9	69.7	119.9	93.2	64.6	58.0	46.1	
		mesh-9 (N5)	No.5	11.3	15.6	4.8	18.6	11.4	6.1	4.4	
		mesh-10				7.6	12.6	17.6	4.2	11.2	
		mesh-11	V			92.5	23.4	29.7	48.2	34.1	17.7
			VI			8.0	4.8	12.3	32.2	17.0	7.4
			平均		12.9	34.8	17.5	25.9	23.0	14.7	11.7
		緊急対策地区平均		26.5	48.8	38.7	36.9	36.8	26.8	19.3	
	重点監視地区	N7		10.5			7.9		13.4	16.1	
N9			5.9	20.2		8.6		13.2	7.3		
N10			16.4			16.8		2.1	7.9		
平均			10.9	20.2		11.1		9.6	10.4		
周辺地区	N1		27.6			0.6					
	N2		10.9								
	N8		0.1			1.0					
	M1		38.8			78.7					
	M2		12.6								
	M3		23.6								
	平均		18.9			26.8					

生息密度は池田（2005）による計算値

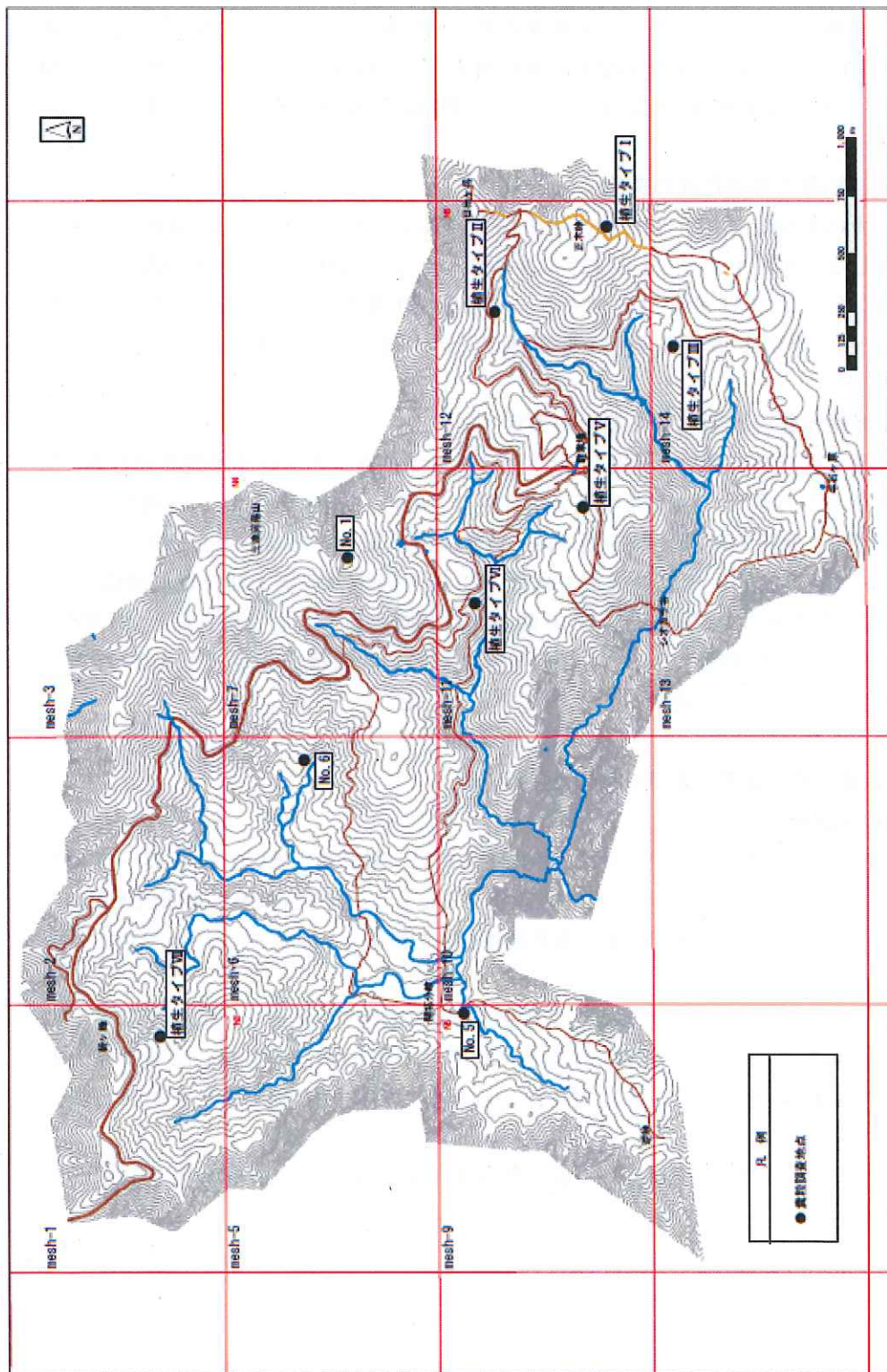
※1 調査メッシュの単位は3次メッシュ（約1 km×1 km）である。重点監視地区および周辺地区で使用しているN1～N10、M1～M3は、ニホンジカ保護管理計画（第1期）で設定した番号であり、Nは奈良県、

Mは三重県を示している。緊急対策地区については、大台ヶ原自然再生推進計画との整合性を図るため、ニホンジカ保護管理計画（第2期）から、新たにメッシュ番号を付した。

- ※2 調査は、基本は調査メッシュ内の任意の点で実施している。ただし、大台ヶ原自然再生推進計画の各植生タイプ調査地点（Ⅰ：ミヤコザサ、Ⅱ：トウヒーマヤコザサ、Ⅲ：トウヒークケ疎、Ⅳ：トウヒークケ密（H15のみ実施）、Ⅴ：ブナーミヤコザサ、Ⅵ：ブナースズタケ疎、Ⅶ：ブナースズタケ密）、大台ヶ原ニホンジカ保護管理計画（第2期）の植生モニタリング調査地点（No.1、No.5、No.6）が含まれる調査メッシュでは、ニホンジカの生息密度が植生に与える影響を把握するために同じ調査地点で調査を実施している。



図一 糞粒調査地メッシュ



図一 2 糞粒調査地点

(2) ニホンジカ保護管理に係るこれまでの取組と評価

①これまでの取組の経緯

i 大台ヶ原ニホンジカ保護管理計画の策定

大台ヶ原におけるニホンジカによる自然植生への影響を軽減させるため、ニホンジカ個体群の健全化と生息環境の回復を目的として、平成13年11月に「大台ヶ原ニホンジカ保護管理計画（以下、この章で「保護管理第1期計画」という。）を策定した（計画期間：平成14～18年度）。保護管理第1期計画では、平成13年度の推定生息数195頭から71頭に、推定生息密度28頭/km²をから10頭/km²に低減することを目標とした。

ii 大台ヶ原自然再生推進計画の策定

ニホンジカの影響を低減するための植生保全対策を実施しただけでは森林生態系の機能が回復しない場所もあり、そのような場所については森林の保全再生の取組が不可欠との認識から、平成17年1月に「大台ヶ原自然再生推進計画」が策定され（計画期間：平成16～20年度）、保護管理第1期計画はその一部として位置づけられた。

iii ニホンジカ保護管理計画（第2期）の策定

保護管理第1期計画を受け、平成19年3月に「大台ヶ原ニホンジカ保護管理計画（第2期）」（以下、この章で「保護管理第2期計画」という。）を策定した（計画期間：平成19～23年度）。保護管理第2期計画では、植生保護が緊急であることに鑑み、緊急対策地区において、平成18年度の推定生息数221頭を保護管理第1期計画と同様に71頭に、推定生息密度を36.8頭/km²から10頭/km²に低減することを目標とした。早期（2～3年程度）に目標を達成するため、計画初期の捕獲頭数目標を設定（平成19年度：70～95頭）するとともに装薬銃による捕獲を導入した。

②ニホンジカ保護管理計画等に基づく取組の評価

i 個体数調整の評価

保護管理第1期計画では、上記の目標を達成するため、緊急対策地区で各年43～45頭を目標としてニホンジカの捕獲を行い、個体数調整を実施した。個体数調整は集団捕獲用わなのアルパインキャプチャー、麻醉銃及び簡易捕獲わなを併用し、平成14～18年度の5年間実施した。

捕獲実績と糞粒法により推定した生息数の年度毎の推移を見ると、保護管理第1期計画策定時の推定生息頭数を上回る状態と考えられるものの、経年的には減少傾向を示している。目標を達成することはできなかったが、個体数調整の効果があらわれたものと考えられる（表-2）。

なお、保護管理第2期計画に基づく個体数調整の結果を併せて表-2に示しているが、計画期間中であることから、ここでは評価は行わない。

表—2 個体数調整の捕獲状況と推定生息数（緊急対策地区）

年度	捕獲頭数 (頭)	捕獲頭数 (頭)	池田(2005)の計算式 により算出した推定 生息数(頭)	池田(2005)の計算式 により算出した推定 生息密度平均(再掲) (頭/km ²)
	計 画	実 績	糞 粒 法	糞 粒 法
平成 14 年度	45	25	—	—
平成 15 年度	45	45	282	48.8
平成 16 年度	44(64)	48	214	38.7
平成 17 年度	44(60)	25	228	36.9
平成 18 年度	43(78)	25	221	36.8
平成 19 年度	70~95	33	188	26.8
平成 20 年度	95	44*	136	19.3

()は変更目標頭数 *12月19日時点の暫定値

平成14年度～平成18年度：保護管理第1期計画

平成19年度～ ：保護管理第2期計画

(参考)

個体数調整の捕獲方法別の捕獲効率をみると、平成20年度は、装薬銃が最も高く0.43、アルパインキャプチャーが0.20、麻酔銃が0.09であった(表-3)。

表—3 ニホンジカ捕獲方法別捕獲頭数および捕獲効率経年変化

	平成14 年度	平成15 年度	平成16 年度	平成17 年度	平成18 年度	平成19 年度	平成20 年度
麻酔銃	18(0.51)	35(0.97)	34(0.53)	21(0.40)	16(0.28)	15(0.74)	3(0.09)
アルパイン キャプチャー	7(0.20)	10(0.28)	14(0.22)	2(0.04)	9(0.16)	3(0.16)	7(0.20)
Box Trap	—	—	—	2(0.04)	—	—	—
装薬銃	—	—	—	—	—	15(0.44)	19(0.43)
くくりわな 試験	—	—	—	—	—	—	15
捕獲頭数 合計(頭)	25	45	48	25	25	33	44

()：捕獲効率

ii 植生保全対策

昭和61年より防鹿柵の設置およびラス巻き付けなどの植生保全対策を実施した結果、これらの対策による食害の影響を排除する効果が認められた。(詳細は1.(3)②に記載)

iii 生息環境の整備

保護管理第2期計画では、森林の保全やニホンジカの冬期移動先等、計画区域外の生息環境保全の重要性も指摘されていることを踏まえ、奈良県、三重県、林野庁、上北山村等の関係行政機関と連携して「大台ヶ原・大杉谷ニホンジカ保護管理連絡会議」を設置しニホンジカの保護管理に関する情報の共有を進めた。

(3) ニホンジカ個体群管理に係る課題

①個体調整に係る課題

保護管理第2期計画においては、早期（2～3年）に緊急対策地区における生息密度を10頭/km²に低減することを目指し、年間の目標捕獲頭数を平成19年度は、70～95頭、平成20年度は95頭に設定して個体数調整を行った。平成19年度より新たに装薬銃による捕獲を導入し、平成20年度には試験的にくくりわなによる捕獲を行ったが、年間の目標捕獲頭数の達成には至っていない。

その結果、平成20年度の糞粒法による生息密度調査では、緊急対策地区で19.3頭/km²であり、平成13年度の調査以降最も低い値となっているが、目標生息密度である10頭/km²の達成はされていない。このため、保護管理第2期計画に基づき、適切な個体数調整を実施するため、既存手法の捕獲効率の向上、新規捕獲手法の検討、効果的な誘引手法の開発といった個体数調整手法の検討・適用を引き続き進めていく必要がある。

②生息環境整備に係る課題

大台ヶ原の植生の状況に応じた目標生息密度の設定の検討等、モニタリングの成果を活かしながらきめ細かな保護管理を進めるための検討を行う必要がある。

また、「大台ヶ原・大杉谷ニホンジカ保護管理連絡会議」において各主体が実施しているニホンジカ保護管理について情報共有を始めたところであるが、ニホンジカ個体群と森林との関係を含め、より広域的な視点で保護管理に取り組むための検討を行う等、連携を強化するための検討が必要である。

3. 利用の現状と課題

- (1) 利用状況の推移（歴史的経緯を含む）
- (2) 利用の特徴（利用特性、利用マナー等）
- (3) 利用による自然環境への影響（これまでの利用対策の成果等を含む）
- (4) 利用の在り方に係る課題

第4章 自然再生の基本的な考え方

自然再生とは、過去に損なわれた自然環境を積極的に取り戻すことを通じ、生態系の健全性を回復することを目的としたものであり、大台ヶ原における自然再生の推進に当たっては、下記の考え方を基本として進める。

【基本的な考え方】

1. 大台ヶ原の特性と復元力を踏まえた取組の実施

森林生態系のこれ以上の衰退を防止するため、残された良好な自然環境の保全を強化するとともに、大台ヶ原の特性や自然の復元力を踏まえた総合的な対策を実施することにより、自律的に存続する健全な生態系の再生を目指す。

2. 長期的な視点に基づく取組の実施

森林生態系の再生には長い年月を要することに留意し、長期的な視点のもとに一つ一つ段階を踏みながら、取組みを進めていく。大台ヶ原においては100年単位の視点のもと、具体的な方針・目標を設定し取組を進める。

3. 科学的知見に基づいた順応的管理

自然再生の推進に当たっては、自然という複雑な系を対象とすることから、得られた科学的な知見や情報をもとに、仮説を立て予測することを通じて、再生までの道筋を検討し、効果的に取組を進める。取組の効果についてはモニタリングによる科学的な検証を行い必要な修正を加えつつ順応的に進める。

4. 関係者の連携

自然再生の各段階における必要な情報を大台ヶ原に関係する多様な主体が共有し、合意形成が図られるようにする。本計画の策定主体である環境省のみでなく、奈良県や上北山村等の関係行政機関、地域住民、自然保護団体、一般利用者等の間で情報を共有することにより、関係者間の円滑な合意形成を図り、それを通じた計画の着実な遂行を目指す。

5. 成果の活用と普及啓発の推進

自然再生を通じて得られた成果については、質の高い自然体験を実現するための取組や、自然環境学習の場等において活用されるよう情報提供の充実を図る。また、紀伊半島ひいては全国における自然再生の取組が効果的に行われるよう、技術的な情報についても積極的に発信する。

第5章 自然再生の目標

1. 目指すべき大台ヶ原の姿（長期目標）（※調整中）

【長期目標】

大台ヶ原の現存する森林生態系の保全を図るとともに、天然更新により後継樹が健全に生育していた昭和30年代前半までの状況をひとつの目安として、質の高い森林生態系の再生を目指すとともに利用との両立を図る。

目指す自然の姿

現在、大台ヶ原で失われている天然更新が行われる森林生態系の回復と生物多様性の保全を目指す(図5-1)。

○ 東大台

昭和30年代前半まで正木峠周辺に広く分布していたような林床にコケが広がり後継樹の生育が見られるトウヒを中心とする亜高山性針葉樹林、その周辺に分布していたトウヒ・ウラジロモミ・オオイタヤメイゲツなどを含む針広混交樹林、大蛇峠などの岩角地植生、点在する湿地植生などの特殊な植生を含む生態系。

○ 西大台

ニホンジカ等による影響が過大となる以前に広く分布していた後継樹を含む低木やスズタケなどの下層植生が豊富なヒノキ・ウラジロモミ等の針葉樹を混交する太平洋型ブナ林、ツルネコノメソウ等が生育する沢筋の湧水地植生、下層植生にメタカラコウ、ヤブレガサ等が生育するトチノキ、サワグルミ等を主体とする溪畔林を含む生態系。

利用との両立

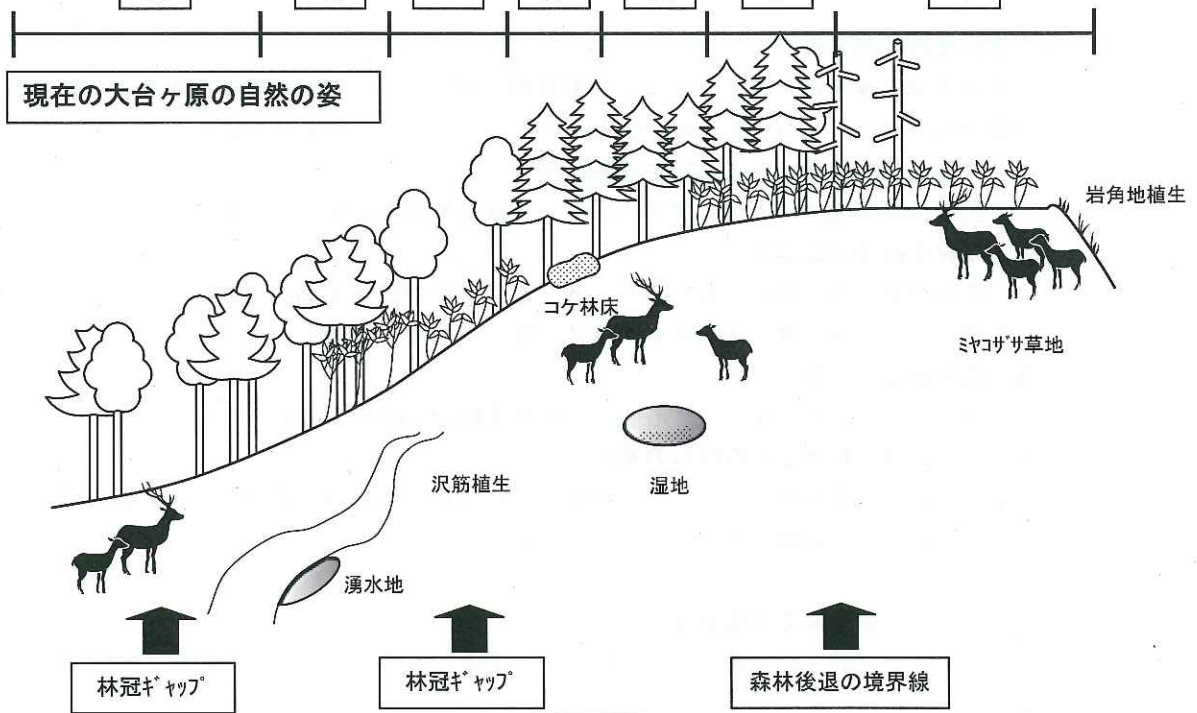
人の利用による自然環境への影響を極力抑え、人為的インパクトをできる限り取り除くため、量の適正化と質の改善を通じて、ワイズユースによる山の利用を目指す。

植生タイプ

ブナスズクサ疎 ブナスズクサ密 ブナミヤコササ トウヒコケ密 トウヒコケ疎 トウヒミヤコササ ミヤコササ

Ⅶ Ⅵ Ⅴ Ⅳ Ⅲ Ⅱ Ⅰ

現在の大台ヶ原の自然の姿



植生タイプ

ブナスズクサ疎 ブナスズクサ密 ブナミヤコササ トウヒコケ密 トウヒコケ疎 トウヒミヤコササ ミヤコササ

Ⅶ Ⅵ Ⅴ Ⅳ Ⅲ Ⅱ Ⅰ

目指す大台ヶ原の自然の姿

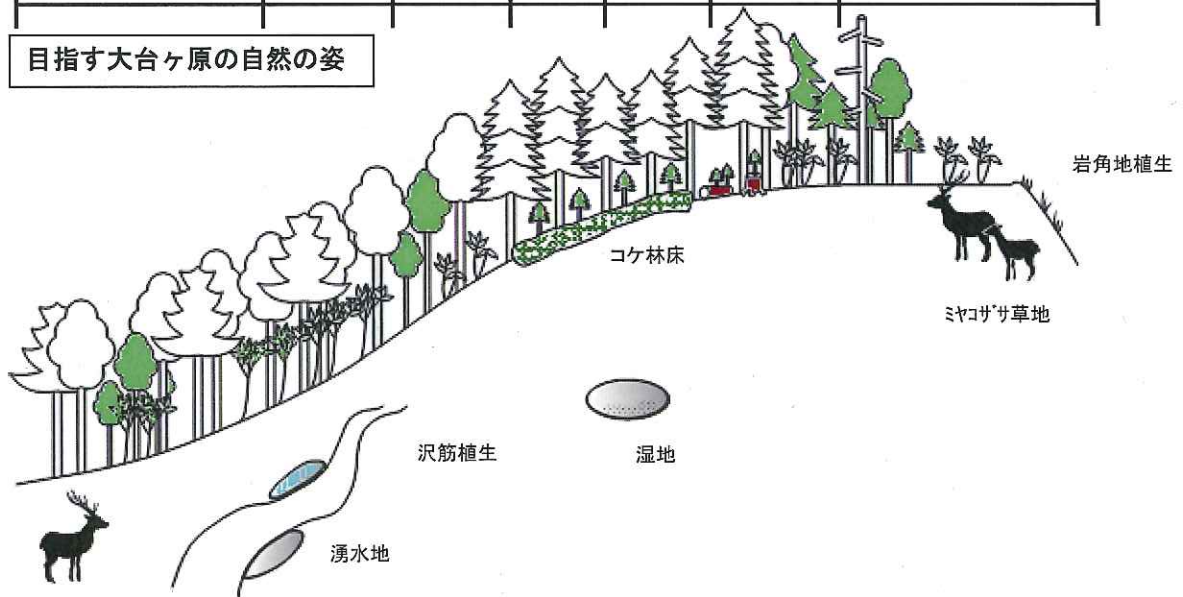


図5-1 目指すべき大台ヶ原の森林の状況

2. 当面 20 年程度の間に実現を目指す姿（中期目標）

大台ヶ原における自然再生で目指す長期目標を達成するために、それぞれの分野ごとに当面 20 年間で実現を目指す姿を中期目標として設定した。

（1）森林生態系保全再生

森林生態系保全再生においては、長期目標に掲げている森林生態系の保全と天然更新により後継樹が健全に生育する環境の回復を目指し、以下の中期目標を設定した。

① 大台ヶ原を特徴づける森林生態系の保全

長期目標に掲げた大台ヶ原を特徴づける森林生態系の保全を目指す。

② 森林更新環境の回復

森林更新の阻害要因を取り除き、健全な森林更新環境を回復させることにより、実生が定着し、後継樹が健全に生育する森林生態系の回復を目指す。

③ 森林後退の抑制

現存するトウヒを中心とする亜高山性針葉樹林の減少を抑制することを目指す。

④ ミヤコザサ草地から森林への遷移

亜高山性針葉樹林がミヤコザサ草地に退行遷移した場所を森林生態系の基礎条件を整えることにより、森林へ誘導することを目指す。

（2）ニホンジカ個体群の保護管理

・ニホンジカ個体群の適正な生息密度への誘導・維持

（3）新しい利用の在り方

・自然環境の保全を前提とした持続的利用（利用との両立）

第6章 目標達成のために実施する取組と評価方法（短期目標）

当面 20 年間の目標（中期目標）を実現するために、それぞれの分野ごとに 5 年（平成 21 年度～25 年度）程度で達成すべき短期的な目標及び短期目標を達成するための取組等について、以下に示す。

なお、実施する取組の詳細については、取組の実施期間等に応じて逐次大台ヶ原自然再生推進計画評価委員会の意見を聞いて定める。

1. 森林生態系保全再生（森林生態系保全部会で検討）

- (1) 目的
- (2) 基本方針
- (3) 取組内容
- (4) モニタリング及び取組の評価

2. ニホンジカ個体群の保護管理

(1) 目的

ニホンジカの個体群管理を通じ、ニホンジカによる植生への影響を低減することにより、現存する森林生態系の保全を図るとともに、継続的かつ自律的な森林生態系を回復に寄与する。「大台ヶ原ニホンジカ保護管理計画（第 2 期）」（以下、この章で「保護管理第 2 期計画」という。）で掲げられた緊急対策地区の目標生息密度 10 頭/km²を目指す。

(2) 基本方針

「森林生態系保全再生計画」に基づき行われる植生保全対策の取組によるニホンジカによる植生への直接的影響の軽減のための取組と併せ、保護管理第 2 期計画に基づき、個体数調整の実施によりニホンジカの生息密度を目標値にまで下げるための取組を行う。

(3) 計画期間

保護管理第 2 期計画の計画期間が平成 19 年度～23 年度となっているため、ニホンジカ保護管理に係る当面の計画期間を平成 23 年度までとする。

なお、平成 22 年度までのニホンジカ保護管理に係る成果を平成 23 年度に検証し、その結果に基づいて、平成 25 年度までの取組の検討を行う。

(4) 取組内容

ニホンジカの個体群を適正な密度に低減させるため、保護管理第 2 期計画の残余期間である平成 21 年度～平成 23 年度までの 3 年程度で実施する取組を以下に示す。

① 個体数調整

平成 19 年度及び平成 20 年度の取組の成果を踏まえ、以下の取組を行う。

i 捕獲頭数の設定

年間の捕獲頭数を、年間の捕獲実績及びモニタリング調査結果等から毎年決定する。

ii 捕獲手法の検討・適用

既存手法の捕獲効率の向上、新規捕獲手法の開発等に係る検討を行い、適切な手法の適用をすすめる。

iii 適切なモニタリング手法の検討・実施

適切なニホンジカの保護管理を行う上で実施すべきモニタリングの内容及び方法、モニタリング結果の評価に関する検討を行う。

iv 植生の回復に応じた目標生息密度の検討

植生の回復状況に応じた目標生息密度の検討を行うため、情報収集を行う。

②植生保全対策

ニホンジカによる植生への過剰な影響を排除するため、防鹿柵の設置、ラス巻き等の取組を進める。（「森林生態系保全再生」による取組）

③生息環境の整備

保護管理第 2 期計画に基づいた取組を進める。特に平成 19 年度に設置した「大台ヶ原・大杉谷ニホンジカ保護管理連絡会議」の取組を強化する。

(5) モニタリング及び取組の評価

目標の達成状況を把握するため、生息状況および植生への影響に関するモニタリング調査を実施し、その結果により評価を行う。

専門家等による大台ヶ原自然再生推進計画評価委員会ニホンジカ保護管理部会等によるモニタリング結果の評価に基づいて捕獲計画を見直す。

3. 新しい利用の在り方推進（利用対策部会で検討）

4. 横断的取組

(1) 情報の共有

大台ヶ原における自然再生をより効果的、効率的に進めるために、成果の共有やモニタリング事項の共通化など各計画間で有機的に連携を図りながら、取組を実施する。

(2) 成果の活用

取組によって得られた成果については、その活用と普及を図るためにインベントリーの充実や調査データの公開、標本・写真の有効活用等を図るものとする。

第 7 章 実施体制等

(記述方針)

評価委員会委員、行政機関等の実施体制とともに、今後の多様な主体の関わり方の方向性についても記述する。

第8章 全体スケジュール

(記述方針)

本計画に記述した計画の実施スケジュールの全体像をフロー図で示す。(計画見直しのスケジュールを含む)

付 録

計画内容等の理解を深めるための調査データ等の背景資料を掲載する。

- 森林生態系保全に関する資料
- ニホンジカ個体群の保護管理に関する資料
- 利用の在り方に関する資料
- 第1期計画の検討概要、事業実施結果等
- その他（歴史年表等）